農業と国土

ＮＰＯ生物多様性
農業支援センター
理事長　原　耕造

スイスに学ぶ国防

国防とは何か。ＴＰＰ参加で経済面ばかり論議されるが、国防の基本は軍備と食料・医薬品・エネルギーの備蓄だ。スイスといえば日本人は永世中立国とアルプス観光を思い浮かべる。永世中立国とは、スイスはなぜ永世中立国か、観光立国がなぜ成り立つか、スイスに学んでみたい。

スイスの国土面積は九州程度の４００万㌶、農耕地は１００万㌶、放牧地は山岳森林地帯に１００万㌶で残りは森林だ。人口は７５０万人、食料自給率は約50％。国民皆兵が国是で徴兵制度がある。国軍は約４０００人の職業軍人と約38万人の予備役で構成、20～30歳の男性に兵役義務があり女性は任意だ。男性の大多数は予備役軍人で、各家庭に自動小銃（予備役将校は自動拳銃も）が貸与され、定年まで各自が保管する。

スイスは１６４８年、神聖ローマ帝国から独立、ナポレオン以降の欧州体制を決めた１８１５年のウイーン会議で「永世中立国」として認められた。スイスは国土の状況から食料が自給出来ず、金を稼がなければ食べて行けない。スイスの銀行や保険が世界的に有名な理由だ。銀行や保険以前に稼ぐ方法は傭兵稼業。傭兵にならなければ食えない国民だった。傭兵は強くなければどの国も雇わない。山岳民族のスイスの傭兵の強さは歴史的に有名。ローマ時代はゲルマン民族の領内侵入を食い止めるため雇われた。ちなみにローマにあるバチカン市国の衛兵はスイス人で、バチカンが雇った傭兵である。

神聖ローマ帝国を舞台にした１６１８年からの30年戦争当時、まだ国でなく市単位のスイス盟約者会議は、外国軍隊の領内通過を禁止した。ドイツ、フランス、イタリアの強国に挟まれ、常に国内を他国軍が通過し市民の安全を脅かしたから。安全確保のため１６４７年、スイス国境警備隊が創設されスイス式武装中立がスタート、国民皆兵の歴史はこの時に創られた。

ハイジの村で知られるマイエンフェルトの田園風景

武装中立後もスイスの産業として傭兵稼業は続き、フランスのルイ14世は傭兵をシステム化。以降、他国の戦争で中立国のスイス人が各国軍隊に加わり殺し合うことも。典型例が１７０１年からのスペイン継承戦争。スイス人傭兵の構成はフランス軍２万３０００人、オランダ軍１万３０００人、サヴオイ軍５０００人、スペイン軍３０００人、ドイツライン都市連合軍２０００人。スイス人は血を売って食物を買うと言われた。永世中立の背景にある血の歴史が、スイスが国民皆兵で武装中立である意味を物語る。

第一次世界大戦でスイスはスェーデンとともに中立を守ったが、ドイツ軍の封鎖で食料輸入が止まり食料難に陥った。

経験からスイスは憲法で食料備蓄を義務付けた。歴史と地政学から国民が飢えない戦略を策定したのだ。当初の国防上の理由から、現在は経済政策の領域まで政策対象を拡大。食料の供給危機をもたらす要因が軍事的脅威から自然災害、事故、伝染病、テロリズム、資源供給国の紛争、気候変動、資源枯渇などへ移りつつあるからである。

食糧備蓄で飢えない戦略

特徴的な飢えない戦略は、非常時はスイス国民の食品消費量を配給によって２３００キロカロリー（通常時３３００キロカロリー）に削減し６カ月間確保する政策。４カ月の義務的責任在庫という基礎制度があり、国と民間企業の契約で担保される。責任在庫機構は民間の自主的組織で、費用は販売価格に上乗せし国民が負担する。

国民の負担額は１人当たり１５８０円程度。内訳は食料５３９円、エネルギー１００６円、医薬品19円などだそうだ。日本の備蓄は米１・４カ月分、小麦２・３カ月分、飼料穀物と大豆各１カ月分。概算在庫費用は１５８億円。１億２０００万人の平均負担額は食料で１３１円程度。石油は６カ月分、ＬＰＧ１・８カ月分で負担額は不明。医薬品はタミフル２１００万人分、リレンザ60万人分が目標。

もう一つの特徴は、非常時の作付けが飼料穀物から熱効率の良い耕種作物中心に生産物を転換できるよう法律で定めたこと。生産統制であり、ぜいたく品の生産や加工を停止し、生命のために特に重要な物資の生産に原料を使用するよう指示できる。

平成５年の大冷害の際、国産米が食べられなかった時、同じ苦労を繰り返さないよう田んぼで米を備蓄した対策と同じ発想だ。通常は田んぼで鶏の飼料として米を生産し、非常時に人間が食べる米にする考え方。現在の飼料米の走りとなった。食料は製品の備蓄だけでなく、農地での備蓄が可能なのである。

スイスは１９８０年代から農家への直接支払い政策を取る。国民の命を守る農地保全のため農家に支払う。そこが直接支払い政策の根本だ。その政策の結果、山岳地帯保持のための放牧がアルプスの景観を保全し、観光収入に繋がる。日本は生命を守る農地が次々放棄され、国民の命が担保できなくなっている。